



古墳巡礼 葛城編

プロローグ 葛城ソツ彦

「葛城氏のソツ彦は、まずまちがいく實在の人物である」という文章に出会って、わたしは大いにこの人物に興味を持った。

歴史学者・井上光貞（一九一七〜一九八三）の『日本国家の起源（岩波新書）』の中の一節である。初版は一九六〇年、わたしが持っているのは一九六七年刊行の第十刷である。

教科書や授業では教えてくれない記紀批判を小気味よく展開し、国家や天皇制の起源に迫る論考はわたしに衝撃を与えた。最近はずみみたいいな新書本が次々と出版される中で、当時の岩波新書の質の高さにはあらためて敬意を表さざるを得ない。

わたしは半世紀以上の間、折に触れてこの新書を書庫から取り出し、何度ページを繰ったことか。読むたびに新しい発見がある。

井上説が正しければ、ソツ彦は名前が確認でき、實在が確認された日本歴史で最初の倭人（日本人）である。

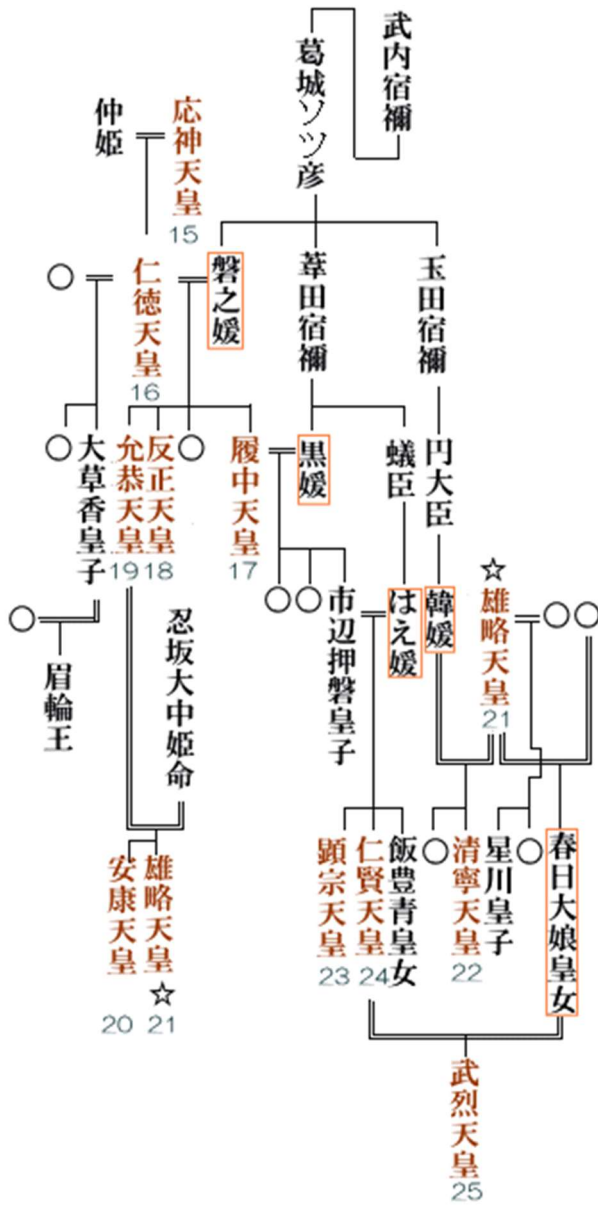
もちろん日本書記には、アマテラスやスサノウをはじめとする多くの神々や古代の大王の名前が記されている。しかしこれらは八世紀に日本書紀が編纂されたとき、当時の王家の由来と正当性を強調するために創作されたもので、すべてが真実とみなすわけにはいかない。皇統については、神武天皇をはじめ九代目の開化天皇までは架空の人物であるという説がいまや古代史の常識である。

井上光貞の葛城ソツ彦實在説をかいつまんで紹介すると次のようにな

る。日本書紀によれば、神功皇后摂政69年に、葛城襲津彦を新羅に派遣して征伐しようとしたとの記事がある。一方、朝鮮半島南西部にあった百済という王国の歴史書にも同一とみられる人物が登場する。

『百済記』に云はく、壬午年に、新羅、

貴國に奉らず。貴國、沙至比跪を遣して討たしむ』という記事を日本書紀の編者は百済記から引用している。百済から亡命してきた人が所有していた百済記を借りて、日本書紀の編纂に利用したのだろう。外国（百済）の史料であることから客観的事実の証明と



して挙げられることが多い。

日本書紀では襲津彦（ソツヒコ）、百済記では沙至比跪（サチヒコ）となっているが、同一の人物と考えられる。わたしも井上説にならって、彼のことを「ソツ彦」と表記することにする。

百済記にある「壬午年」というのは西暦でいえば三八二年に該当すると想定されるから、彼の活躍した時期は四世紀後半から五世紀前半である。葛城の名は、現在でも奈良県葛城市や葛城山として残っている。ソツ彦の名前の葛城も、この古代からの地名に依っており、現在の葛城市やその南の御所市あたりを本拠地とする豪族だったと想定して間違いないだろう。

四世紀末から五世紀初めというと、畿内に勃興したヤマト政権はまだ他の豪族を圧倒する絶対的な力を持っていたわけではない。大王の地位は各

地域の首長から構成される連合政権の盟主に過ぎなかったと想定される。

奈良盆地東南部に拠点を置くヤマト政権に対し、葛城一族は葛城山や金剛山の東麓、奈良盆地西南部に勢力を張っていた。そしてヤマト政権と同盟関係を結びながら、政権内部で大きな力をふるっていたと考えられる。

五世紀のヤマト政権は「大王と葛城氏の両頭政権」であったと考える直木孝次郎のような歴史学者さえいるのである。

その証拠が、ヤマト政権と葛城一族の婚姻関係である。葛城ソツ彦を始祖とする葛城家の系図を見ていただきたい。ソツ彦の娘、磐之媛は仁徳天皇の皇后になっている。生まれた三人の男子は履中・反正・允恭という十七代から十九代の三代にわたる天皇位に就いた。

ソツ彦の息子の葦田宿禰の娘、黒媛は履中天皇の妃となり、市辺押磐皇子と飯豊皇女を生んだ。市辺押磐皇子の妃で、顕宗天皇・仁賢天皇の母であるはえ媛はソツ彦のひ孫だ。さらにソツ彦の孫である円大臣の娘、韓媛は雄略天皇の妃になって清寧天皇をもうけている。

従って、仁徳より仁賢に至る九代の実天皇のうち、安康天皇を除いた八代の



天皇が葛城氏の娘を后妃か母としていることになるのである。葛城氏から大臣になったものも何人かいる。

飛鳥時代(七世紀)には、蘇我氏が大王家の外戚として政治権力を握った。奈良時代(八世紀)には藤原不比等が二人の娘を文武・聖武の皇后にするこゝに成功し、藤原氏繁栄の基礎を築いた。血縁や婚姻に基づく親族関係はいまでも日本で力を振るっている。

葛城氏が大王家と外戚関係を結ぶためには、それなりの力を持っていないければならない。侮れない相手であるからこそ、娘を嫁にもらって親戚になるのである。いざとなればその力を借りて競争相手を蹴落とさなければならぬ。

葛城氏の力の源泉はどこにあったのだろうか。書紀に記されたソツ彦の事績がヒントになる。書紀によれば、

神功皇后摂政69年に、葛城ソツ彦を新羅に派遣して征伐しようとしたという記事があることは前に触れた。百濟記の記事では、新羅征伐に赴いたソツ彦が、新羅が差し出した美女二人の濃厚な接待にのぼせ上ってしまい。挙句の果てに何を考えたのか新羅と戦うどころか倭の友好国である加羅国を攻撃し、加羅王は百濟へ逃げ込むしなくなる。

また、ソツ彦は、新羅からの人質を一時帰国させるのに同行するように神功皇后から命じられるが、だまされて人質に逃げられてしまう。人質を追って半島にわたったソツ彦は、腹いせに新羅の人民を捕虜として拉致して連れ帰る。さらに加羅から弓月の民（渡来民）を連れてきたり、無礼があった百濟王族を連行したりしている。このように、ソツ彦に関する記事は、

ほとんどが朝鮮半島での活動に関するものだ。人質に逃げられたり、美女のハニートラップに引っかかったりと少し間抜けな面もあるが、まず新羅と戦えるだけの軍事力を動かせる指揮官としての役割が目につく。次に当時の技術先進地帯の半島から人を連れてくる帰化事業、移民政策に携わっていて、多くの技術者や職人を傘下に抱えていたのではないだろうか。

もちろん記紀に記されたソツ彦の行動をすべてうのみにすることはできない。ソツ彦を朝鮮に派遣したという神功皇后自体が現在の歴史学では架空の人物と見なされている。しかしソツ彦に関する記述に多くの脚色がなされていたとしても、軍事力と先進技術、この二つが葛城氏の力の源泉になっていたことが背景にあったの脚色であることがうかがえる。宮本武蔵

が実在の人物だとしても、吉川英治が描く『宮本武蔵』がすべて事実に基づいているわけではないのと同じだ。

五世紀に大王家と並び称されるほどの大きな力を振るった葛城一族の祖、ソツ彦の足跡をたどり、日本というクニの揺籃期に思いをはせてみたい。そんな思いから、わたしは葛城の地を訪ねてみたいと思うようになった。

白洲正子は『葛城のあたり』の中で「飛鳥は日本のふる里といわれるが、神武天皇以来、いやそれ以前から開けていた葛城地方こそ、大和文化発祥の地だといえる。ただあまり古すぎて山と山にまつわる物語しか残っていないのが、飛鳥や山の辺の道ほど人気がわからないゆえんかも知れない。正にそのところが私の興味を引くのであって、原始のままの風景や信仰ほど、

ひとの想像力をそそるものはない」と述べている。

「原始のままの風景」は大きさであるが、京都市や奈良市のような寺社の大伽藍があるわけではなく、田畑に囲まれ庶民の暮らしが息づく田舎道でのんびりと辿る旅になるだろう。必要なものは歴史への想像力である。

葛城古道

春の古墳巡礼は百花繚乱の中の旅であった。一目百万遍の桜の花びらが風に舞い、飛鳥川の水面は花筏でおおわれていた。

秋の大和路は稲穂がたわわに実り、トンボがその上を飛び交う、日本の原風景を見るような旅だった。

わたしがまず訪れたのは、奈良県御所市にある葛城古道と名付けられた道である。葛城古道は大阪府と奈良県

を分ける葛城、金剛の山並みの東麓を南北に走る道である。緩やかに傾斜する扇状地を横切るように走っており、標高百五十メートル程度の微高地の



葛城の道概念図 右が北

道だが、大和盆地の眺めが美しい。

葛城古道は、近鉄御所駅の真東である御所市櫛羅の集落辺りから始まり、奈良時代の名僧行基菩薩が開創したと伝えられている九品寺、記紀にも登場する一言主を祀る葛城座一言主神社、江戸時代に建てられた代官屋敷である中村家住宅、葛城氏の祖神を祀る高天彦神社、高鴨神社などを経由して「風の森」に至る約十三キロメートルの道である。沿道には千五百年前から伝わる古い地名も数多く残っている。まず訪れたのは浄土宗の九品寺である。親鸞聖人は念仏さえ唱えれば誰でも極楽往生できるといったが、真面目なものとは真面目なものが同じような往生ではあまりに不平等である。そこで浄土宗では生前の行いによって九種類の往生の仕方がありと説く。九種類とは上品、中品、下品の三種



九品寺の本堂。左下に行儀菩薩の石像がある

類と、その中がさらに上生、中生、下生の三種類に分かれているというもの。上品上生が一番良いが、これだと往生するとき豪華な乗り物でにぎやかに迎えが来る。逆に下品下生だと質素な乗り物だけになるようだ。

旅好きの方で、「わたしはエコノミ―でも良いわ」などと言っていると、乗り物だけでなく極楽での待遇も変わってくるらしいから注意が必要だ。浄土宗の坊主でもないのにあまりいい加減な解説をしているとバチが当たるのでこの辺にしておく。

ご本尊の阿弥陀様は拝めなかったので、本堂の左手にある行基菩薩の石像に深々と一礼し、有名な千体石仏を見るために寺の裏側に回った。

南北朝時代にこの地を支配していた楢原一族は圧倒的戦力を誇る幕府軍に対し戦況不利な中、楠木正成に味方して南朝方として参戦する。この時、多くのものが無事の帰還は望むべくもないとして、自身の身代わりとして石仏を奉納したといわれている。

山の斜面に沿っていろいろな形をした石仏がところ狭しと並んでいる



九品寺の千体石仏。本堂裏の山中にある

のは壮观だ。千体石仏というがそれをはるかに超える数が並んでいる。多くは苔むしていて、彫られているお顔もはっきりしないものが多い。

楢原氏は激動の南北朝でその勢力

を保ち続けることができず、この地を去っていったという。栄枯盛衰はこの世の定めとはいえ、滅びたものには哀れを催さずにはおられない。

九品寺の背後の葛城山中腹には、榎原氏が本拠にした榎原城の跡が残されている。楠木正成が立てこもった千早城もすぐ近くだ。私の愛読書『太平記』によれば、正成はこの山城に拠って、奇策を縦横に駆使し、百倍の敵を翻弄した。千早城は日本百名城の一つに指定されている。

楠木正成は戦前は後醍醐天皇を助けた忠臣として教科書にも載るほど有名だったが、戦後は影が薄い。ちなみにわたしの母は「青葉茂れる桜井の、里のわたりの夕まぐれ♪」と若き日に覚えた「楠公の歌」を機嫌がいい時には口ずさんでいた。

千体石仏も素晴らしいが、この寺の

屋根の美しさは特筆に値する。石仏がある裏山と屋根の高さが同じなので、屋根が間近に眺められる。見事な勾配とともに、いぶし銀と呼ばれる灰色の瓦の美しさが際立っている。

日本に瓦の製法が伝えられたのは六世紀末の飛鳥時代。仏教とともに伝来した。日本書紀には「百濟から四人の瓦博士が渡来した」との記述があり、明日香村の飛鳥寺の瓦が日本最古のものとして伝えられている。

国内の瓦工による国産瓦で葺いた屋根は六〇九年の法隆寺が最初である。それ以来、千四百年に渡って瓦は造り続けられた。この寺の大屋根は、その技術の結晶ともいえる。

美しい屋根の向こうには御所市の中心部から明日香辺りの盆地がよく見える。遠くにかすむ山並みは宇陀あたりであろうか。左手には大和三



九品寺の本堂の大屋

山も一望できる。

九品寺から一言主神社までは、人がすれ違うのも難しいような細い未舗装の道を行く。収穫を直前に控え

た稲穂が風に揺らぎ、真っ赤な彼岸花が青空に彩りを添える。

田んぼの水抜きに来ていた農家の方と出会ったので話を聞いてみた。

「こんにちは。今年の出来はいかがですか」

稲穂を握って眺めていた麦わら帽子が振り返って、驚いたように私の顔を見た。私と同じ七十過ぎの陽に焼けた顔がほころんだ。

「今年はいいよ。穂が出てから天気が良かったからね」

「これはなんとという品種ですか」

「ひのひかり。奈良県の農協が推奨している。うまいコメだよ」

わたしが泊まっている明日香村の民宿で出されるコメが毎日おいしいことを思い出した。関東ではあまり聞かない品種だが、西日本では主力品種らしい。

「収穫はいつ頃ですか」

「アオがまだ多いから、あと十日から二週間というところかな。若い連中は収量が欲しいから遅めにして、穀粒を大きくするが、少し早めの方がコメがうまい」



アオというのはモミがまだ黄金色にならず、緑の部分が多いことを指す言葉らしい。肥料のよききいたイネは、もみが黄色くかわっても、茎や葉は緑色をしていると教えてもらった。

農家の方とのんびり話をしていたので予定の時間をだいぶオーバーしたが、この日（九月二十七日）は天気も良く、トレッキングを楽しむのには快適な陽気であった。

田んぼの脇には彼岸花が咲き乱れているのが目立つ。その真っ赤な花の色は、周囲の稲穂の緑の補色であるだけにいっそう印象的だ。子供のころ、この花は毒があり、小便をかけるとオチンチンが腫れると脅された。

彼岸花が日本にやってきたのは稲作がもたらされたのと同時の弥生時代である。球根が有毒なため、モグラ



除けのために、田んぼの畦に植えられた。また球根は有毒であるが、水にさらすと水溶性のアルカロイドが溶けて流れ出し、残ったでんぷんが食用になるため、飢饉のときなどに利用されたという記録が残っている。田畑の近くでこの花が多く見られるのは、こう

いった事情があるからだ。

一言主神社に向かって田んぼのあぜ道のような細い道をのんびり歩いて行くと、金網の柵が行く手を遮っている。通行禁止かと危ぶんだが、イノシシの防止柵だ。その先は杉の木立がうっそうと茂る森になっている。山から森伝いにやってくるイノシシが田畑を荒らすのを防ぐために設置されたものだろう。防止柵をくぐり抜けて少し進むと森の中に「綏靖天皇葛城高丘宮跡」という石柱が道の脇に立っている。

記紀では、綏靖（すいせい）天皇は神武天皇に続く第二代の天皇とされているが、現在の歴史学では架空の人物とされている。宮跡の場所は、ほとんどが幕末から明治にかけて決められたもので、この石柱が設置されたのも大正時代である。

しかし二代の綏靖だけでなく、三大の安寧、五代の孝昭、六代の孝安がいずれも葛城の地に宮を構えたと伝承されたのには何か理由があるのだろう。記紀の編集者たちは、王家の由来が葛城の地と深く関わっていたと考えていたのかもしれない。

この「葛城高丘宮」については面白いエピソードが記紀に残されている。葛城王朝の祖、葛城ソツ彦の娘、磐之媛（いわのひめ）は仁徳天皇の後に



綏靖天皇葛城高丘宮跡

なっているということは前述した。このお后が大変なやきもちやきで、女好きの仁徳天皇を困らせたという話である。仁徳天皇は八田若郎女（やたのわかいらつめ）という異母妹を以前から憎からず思っていたが、磐之媛の猛反対で後宮に上げることができなかった。

しかし天皇は磐之媛が旅行中に、八田若郎女を召して思いを遂げ、昼夜を問わずいちゃついていた。旅行の帰途、この話を耳にした磐之媛は大いに怒り、天皇の出迎えもすっぱかして即刻家出する。

いまでも夫が気に入らないと実家に帰ってしまう妻がいるという話を聞くが、これと同じだ。そのとき磐之媛が詠んだ歌というのが古事記に残されている。

奈良を過ぎ、小楯倭を過ぎ、我見が

欲ほし国は葛城高宮、吾家辺り

この「葛城高宮、吾家辺り」を、いまわたしが立っている高丘宮跡に比定する有力な説がある。磐之媛の実家、すなわちソツ彦の家がこのあたりにあったということだ。

白洲正子は『葛城のかくれ里』の中で、この辺の風景を「下は麓の方まで、美しい段々畑がつづき、山地とはいえ肥沃な土地であったことがわかる。この景色のいい所で、磐之媛は育ち、あの情熱的な歌が生まれたということ、私にとってひとしお感慨ぶかいものがあった」と書き残している。

仁徳天皇の女性問題は八田若郎女のケースだけではない。黒媛という吉備出身の美人を宮中に入れたのだが、それを知った磐之媛は激しく反発し、黒姫を徹底的にいじめた。この嫉妬深さに黒姫は故郷に逃げ帰ろうと船に

乗るのだが、船から降ろして歩いて帰させたという。

仁徳天皇といえば、煙が上がっていない家々を見下ろして民が困窮している証拠だとして税金を三年間免除したという人徳高い天皇として伝わ



る。その天皇が女好きで苦勞するとい
う話が同時に伝わるのも面白い。

時代はかなり後のことだが、七〇一
年にできた大宝律令では、天皇の妻妾
を皇后一人、妃二人、夫人三人、嬪四
人と定めている。呼び方は親の位階に
よるものだ。このほか采女などは地方
豪族の献上品だから何人手を付けて
もよい。ご苦勞なことだ。

これが当然と考えられていた時代
なのに、記紀の編集者たちはなぜこの
エピソードを取り上げたのだろう。記
紀は国家の威信をかけた歴史書であ
り、ゴシップ好きの週刊誌とは違う。
浮気者の大王と嫉妬心の強い妻の話
と読むのではなく、妻の実家の葛城一
族に遠慮せざるをえないヤマト政権
の大王側の立場を象徴するものとし
て記載されたとわたしは解釈したい。
高丘宮跡から五分もしないうちに



一言主神社参道

一言主神社への石段の前に出た。石段
の手前には手水舎と祓戸社があった
ので、口をすすぎケガレを祓い清めて
から石段を登る。一言主は一言の願
事なら何でも聞き入れてくれるとい
うありがたい神様とされている。地元
の人たちには「いちごんさん」と呼ば
れ、崇拜を集めているという。

社伝によれば、「本社は雄略天皇四

年春「吾は悪事も一言、善事も一言、
言い放つ神、葛城の神なり」と、この
郷に顕現された神様を御奉斎してお
ります」記されている。

雄略天皇は第二十一代の天皇で、仁
徳天皇の孫にあたる。仁徳天皇の次
には、磐之媛との間に生まれた子供たち
が、十七代履中、十八代反正、十九代
允恭とつぎつぎと皇位を継承する。允
恭の皇子で二十代安康天皇が突然亡
くなった後、弟の雄略は政敵を次々と
倒して、二十一代の天皇に就く。

雄略天皇と一言主が葛城山で出会
う話は、古事記、日本書紀の両方に記
述があり、若干の違いがあるが、こ
こでは古事記をわたしなりに意識して
みよう。

『雄略天皇が葛城山へ狩りに出かけ
た時、天皇一行とそっくりな衣装を着
けて向こうの尾根を登ってゆく一団



を発見した。この倭国においてわたし以外に王はいないはずだ、お前は誰だ、と雄略は問いかけた。するとこだまが帰ってくるように向こうも、お前は誰だ、と応える。その口ぶりもまるで天



一言主神社拜殿

皇のようだ。怒った天皇は、家来みんなに矢をつがえさせます。すると向こうの一行も矢をつがえてまきに一触即発という状態のとき、向こうの神が「吾

は悪事も一言、善事も一言、言い放つ神、葛城の神なり」だと応える。天皇は恐れかしくみ、私は人間なのであなたが尊い大神であることが分かりませんでしたと言って、刀や弓矢をはじめ、百官の家来の着ている衣服を脱がせて献上した』

このエピソードの意味するものは何だろう。ヤマト政権の首長といえども、自分が直接支配する地域の外では、その土地の神、言い換えればその神を奉ずる土地の豪族にそれなりの敬意をはらっていることを示しているとも考えられる。

雄略天皇といえ、五世紀半ばから末にかけて活躍した天皇である。

雄略天皇の名が刻まれた鉄刀・鉄剣が熊本の古墳と埼玉の古墳で見つかったことから、五世紀後半にはすでにヤマト政権の支配圏が九州から関



して、結果だけを求めてはいけないという教訓が、願い事をかなえてくれる神にはついて回る。

にとって一言主の靈験よりも、柿の「お安い」ことの方が重要らしい。神社の長い参道を東に下り、バイパス山麓線の下をくぐると森脇の集落に出る。ここにある一の鳥居を潜り、

願い事をするには朝から何もしゃべってはいけないという教えを知ってか知らずか、わたしの後からやってきた妙齡の女性の一団は、路傍の無人販売の果物や野菜が気になるらしく、大声で盛んにしゃべっている。彼女ら

一言主神社を後にする。葛城古道はここから豊田、長柄の集落を抜け、佐田までほぼまっすぐに南下する道が続く。

この辺は葛城古道の中でも昔の街道の面影を残す古い町並みが残っている場所だ。両側には立派な石垣を積んだ家や焼杉板の外壁がレトロな雰囲気を醸し出した家が続く。

名柄付近は街道に沿って住宅が密集している。長柄はいまはナガラと呼ばれているが、古くはナガエと呼ばれていた。実は冒頭に紹介した葛城ソツ彦の名は、『古事記』では「葛城長江會都毘古」と記載されており、この「長江」は「長柄」と同じで、一説にこの「長江」が後に「長柄(ながえ)」と表記され読みが「ながら」に変わったと言われている。つまり、ここ長柄は葛城氏の始祖である葛城ソツ彦の生地あるいは拠点と考えられるのである。

前ページの地図をご覧になれば、長柄が南北の葛城古道と東西の水越街道を結ぶ四つ辻で交通の要衝にあ



長柄の四つ辻。右が葛城古道、左が水越街道

ことが分かる。水越街道は葛城山と金剛山の鞍部にある水越峠を越える道で、河内と葛城、さらには大和を結ぶ重要な道であった。現在も国道

三〇九号線として残されている。

長柄の四つ辻周辺には神社や寺院などが密集しており、ここが名柄集落における中心的な場所だということ



長柄四つ辻付近の旧家

が分かる。江戸、明治の面影を残す落ち着きと親しみやすさを兼ね備えた古い民家が多く、家々の門構えも重厚さを感じる。

写真は四つ辻近くの江戸時代から続くと思える民家だ。クスノキとケヤキの大き木を背に急こう配の大きな屋根と緩勾配の庇のような屋根の組み

合わせは大和棟といわれ、この地方独特の建築様式である。急こう配の屋根は、昔は藁屋根だったかもしれない。焼杉の木の堀と白壁のコントラストが美しい。

また長柄は弥生時代の祭器である銅鐸が出土したことでも有名である。四辻のちょっと北側の田んぼの中から、大正七年、溜池造成工事中に銅鐸と銅鏡が出土した。鏡と銅鐸と一緒に埋められていた例は珍しく、いずれも国宝として東京国立博物館に収蔵されている。長柄は古代より祭祀の行われた聖地だったのだ。

いずれにしてもこの長柄には、今から二千年以上も前の弥生時代から人々が集落を形成し、幾多の時代の変遷を潜り抜けながら、次の世代にバトンを渡し続けてきたのだ。連綿と受け継がれる「人間の営為としての歴史」

を感じざるを得ない。

ちょうど昼食時間になったので、四辻近くの長柄神社の境内で弁当を開かせてもらうことにした。大きな木立があり、一休みするには絶好の日陰を提供してくれている。長柄神社は正和元年（一三一二）に遡る棟



長柄神社

札が現存しており、本殿の建築様式は室町時代まで遡る可能性があり、

奈良県の文化財に指定されている。

また、日本書紀には天武天皇が長柄社に行幸して、流鏑馬のような行事を行ったという記事があり、この長柄社が長柄神社のことを指すとすれば、さらに歴史を遡る古い神社ということになる。

長柄神社でゆっくり休憩を取り、再び葛城古道を南下する。長柄の四辻を東に二キロメートルほど進むと葛城ソツ彦の墓ではないかと推測されている室宮山古墳がある。南下する前にその古墳に立ち寄りたかったのだが、時間的に無理と判断して、古墳探索は翌日に回すことにした。名柄から佐田に入ると集落は途切れ、ふたたび田園地帯となる。春日神社を見て井戸地区を過ぎれば、徐々に

上り勾配となり南郷の集落が前方に見えてくる。

長柄神社から三十分ほど歩くと、道の脇に「南郷遺跡群」の案内板を見つけた。案内板の内容を書き写してみよう。

「奈良盆地の西南部、金剛山麓で見つかった巨大集落遺跡で、五世紀代に大王家の外戚として強大な権力を誇った豪族葛城氏の本拠地とされる。

遺跡群の範囲からは葛城氏の首長が関わったとみられる居館や、祭祀に関わる遺構、朝鮮半島から渡来した人々の痕跡が濃厚に認められる武器などの工房や住居といった様々な遺構が見つかり、奈良県桜井市纏向遺跡や天理市布留遺跡などととも日本古代史を明らかにする上で重要かつ貴重な成果が上がっている」

案内板があった道路脇は急な斜面

になっており、御所市の住居が密集したあたりがよく眺められる。足元の斜面を覗き込んでみても、遺跡のようなものはどこにも見当たらず、この辺に五世紀から六世紀の古墳時代に葛城氏の拠点があったとは知る由もない。南郷遺跡群は奈良県の圃場整備事業に伴う事前の調査のために、檀原考



室宮山古墳と南郷遺跡 檀原考古学研究所



葛城古道沿いから眺めた南郷遺跡

古学研究所によって平成四年から五年にかけて発掘調査が行われた。およそ皇居外苑の二倍にあたる広大な範囲にわたって二十か所以上の遺跡



発掘中の南郷遺跡

が存在していることが分かった。中心が御所市の大字南郷に位置することからこれらを総称して南郷遺跡群と呼んでいる。いまは、遺跡はすべて

埋め戻され、一帯には整備された田畑が広がっているだけだ。

各遺跡は機能分化し、有機的に関連を持っていたとみられる。橿原考古学研究所の報告に基づいて、いくつかの遺跡を紹介しよう。

代表的遺跡である極楽寺ヒビキ遺跡は、石葺きの護岸を持つ幅十メートルから二十メートルの濠で囲われ、さらに柵で二重に囲まれた建物跡が発掘された。祭殿、工房、倉庫などを思わせる建物群の他に、四面に庇が付く大きな二階建て掘立柱建物跡が見つかった。下の図は神戸大学の建築史の研究室が復元した想像図である。

面白いのは、柱痕の穴の土が赤い土に置き換わっていることだ。これは火災の跡で、遺跡の建物や塀はほとんどが焼失しているという。これに関して古代史の和田萃京都教育大



学名誉教授は「柱の根元まで徹底的に焼かれている。五世紀中ごろの消失とすれば日本書紀に記された円大臣の焼き討ちの記述と一致する」と述べ、前述した雄略天皇に焼打ちされた葛城円大臣（つぶらおおみ）の居館または政治や祭祀を行う公共

施設である可能性を指摘している。南郷ヒビキ遺跡は、恐らく葛城ソツ彦の時代から葛城氏の政治センターともいべき重要な拠点だったのだろう。

ちなみに、この遺跡の柱穴から、分厚い板状の角柱が使われていたことが判明し、このような建物の形状が、奈良県御所市室の「室宮山古墳」から出土した家形埴輪と見事に一致したのだ。

南郷大東（なんごうおおひがし）遺



室宮山古墳出土 家形埴輪



水の祭祀想像図

跡も興味深い。導水施設があり、水に
関する祭りを行っていたという。深さ
一メートル、幅六メートルほどの川を
石積みでせきとめて水を溜め、そこか
ら木樋で小屋に水を引き込み、水の祭
りをしていたようだ。小屋周辺から桃
の種などの祭祀用具や多量の焼けた

木片が見つかり、祭りは夜に行われた
ことが想像される。

もちろんこの水は日常生活にも使
われていた。水路の途中に何か所も水
をためる槽を設けてごみなどを沈殿
させ、きれいな水を村まで引いてきて
いた。

南郷遺跡群の中には、工業団地や交
易センターを思わせる遺跡もある。遺
跡群西端の高所にある南郷角田遺跡
では、銀、銅、鉄などの複合的な工房
が配置され、様々な鉄器や玉、ガラス
玉などが造られていた。

葛城ソツ彦が戦争捕虜として多く
職人や技術者を朝鮮から連れてきた
ことは冒頭に述べた。これらの渡来人
は葛城氏の管理下でこの地に住み着
き、先進技術を用いて様々な製品を作
っていたのだろう。それらの製品は交
易を通じて葛城氏に富をもたらしした

だろうし、また鉄製の武器などは戦闘
力を高めるのに役立つたに違いない。

技術者系だけでなく、住宅区域と思
われる集落遺跡もある。大型倉庫群
(井戸大田台遺跡)やカマドを持った
居館状遺構(多田松木本遺跡)が造営
され、渡来人の居住区が各所に配置さ
れた。

これらの複合的な施設群を見ると、
市場があり商店があり工場があり、さ
らに一般の住宅が並ぶ現在の「都市」
の形態とあまり変わらない。「都市」の
周囲には食料生産のための田畑が広
がっていた。

南郷遺跡群の発掘は謎の多かった
古墳時代の首長に率いられた集落の
実態を明らかにし、当時の「都市」を
考える上で貴重な手がかりを提供し
てくれたのである。

葛城古道を辿り、葛城ソツ彦を始祖

とする葛城氏は、渡来人がもたらした先進技術を駆使し、そのもたらす富をもとに、大王家の外戚としての地位を確保し、権勢を振るってきたことが分かった。

しかし五世紀の中ごろには有力豪族を自らの足下に屈服させ、大王による強力な統治を確立しようとした雄略天皇によって弾圧され、円大臣の滅亡をきっかけに葛城本宗家は急速に力を失ってしまう。

だが葛城氏は葛城地方を拠点とする多くの豪族の連合体である。本宗家と運命を共にした豪族もあっただろうが、雄略の膝下に入り生き延びた豪族もあっただろう。すべての力を失ってしまったわけではないことは書き加えておかねばなるまい。

九月の末とはいえ、夏の名残を思わせる日差しは強く、汗がシャツを濡ら

している。朝の九時半ごろに九品寺を歩き始め、すでに一万五千歩ぐらいは歩いた。午後二時近い。さすがに古希過ぎの身にとってはこたえる。足取りも重くなってきた。

予定では、高天原伝説で有名な高天彦神社によることになっていたが、神社は金剛山に向かつて急な坂を登らなければならぬ。躊躇なく予定を変更し、帰りのバスを拾うために「風の森」バス停に向かうことにした。

室宮山古墳

古墳時代の中期、四世紀から五世紀中ごろにかけて大きな力を持った葛城氏の首長たちがどのような墳墓を持っているのか興味があるところである。

葛城地方の南部、御所市には大小さまざまな古墳が千基近くあり、おそら



く日本有数の古墳密集地帯といえるだろう。まず真っ先に挙げるのは室宮山古墳。地元では「室の大墓」と呼ばれており、全国有数の巨大な前方後円墳である。葛城氏の始祖、葛城ソツ彦の墓とする有力な説がある。

そのすぐ南には室宮山古墳を見下ろすように巨勢山古墳群がある。古墳

時代の中期前葉に室宮山古墳が築造されたことを契機として出現し、後期中葉を築造のピークとして終末期に至るまで約八百基の古墳が築かれた。恐らく日本最大級の群集墓であろう。

室宮山古墳から東へ一キロメートルほど田舎道を辿ると、巨大な石室があることが最近の調査で分かり、考古学会でがぜん注目を集めている條ウル神古墳がある。

そこからさらに一キロメートルほど東北に進むとヤマトタケルの墓とされる琴弾原白鳥陵がある。さらに東北に一・五キロメートルで雄略に攻め滅ぼされた葛城円大臣の墓と言われる掖上罐子塚古墳（わきがみかんすづかこふん）に着く。

歴史上きわめて興味深いこれらの古墳が歩いて一時間以内にかたまってあるのは古墳愛好家にとってあり

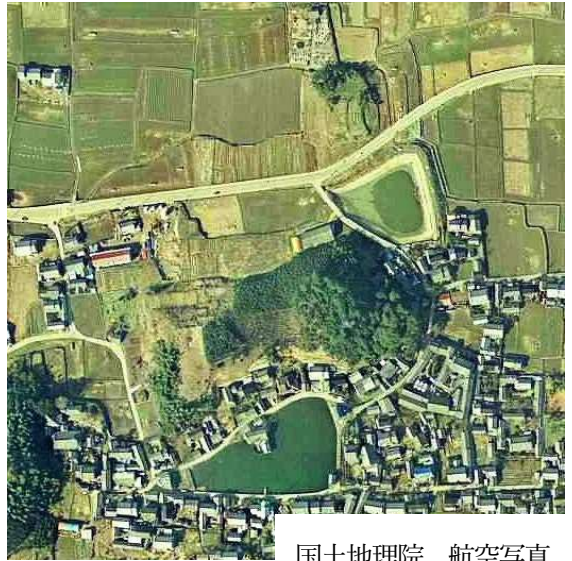


がたい。まず初めに尋ねたのは御所市にある宮山古墳である。

南葛城最大の古墳で、全長二三メートルの巨大な前方後円墳である。全国でも十八番目の大きさを誇り、五世紀初めの築造と考えられている。この地に君臨した大豪族の首長墓と考えて間違いないであろう。

国土地理院の航空写真で見ると、南側に周濠の跡と思われる大きな池があり、池の周りに室の集落がひろがっている。北側にも国道との間に周濠の跡が残り、国道のすぐ北に古墳らしきものが見えるが、室ネコ塚古墳と呼ばれる大きな方墳である。猫が葬られているわけではなく、室宮山古墳の陪塚（ばいちょう）で、室宮山古墳に葬られた首長の近親者の墓だと推定されている。

さて、室宮山古墳は、中世には神



国土地理院 航空写真

功皇后を始め歴代の天皇に仕えた忠臣、武内宿祢（たけうちのみすくね）

の墓と言いつた。武内宿祢は葛城氏、平群氏、巨勢氏、蘇我氏らの共通の祖と仰がれ、三百三十三歳まで生きてとされる。戦前には絶大な人気があり、お札の肖像画にも採用されている。

しかし最近の歴史学では架空の人物とされ、実在は否定されている。有力視されているのが、葛城氏の始祖で

ある葛城ソツ彦の墓とする説だ。

五世紀初めにはヤマト政権の大王墓やその妃の奥津城として佐紀盾波古墳群が営まれたが、それらに匹敵あるいは上回る規模で、葛城氏の勢力の大きさがうかがえる。

陪塚と見なされる室ネコ塚古墳から大量の武器や武具が埋葬されていたことも重要で、これらを一元的に集中管理する軍事部門と部下を従えるほどの政治システムを整えていたことを示している。

国指定の遺跡で、古墳好きには垂涎の的である室宮山古墳も、一般の方の関心は低いらしく、室の集落に車が入っても案内表示などは見当たらない。近くと思われるところに寺の参拝者の用の大きな駐車場があったので、車を止め、寺の人に場所を聞いてみることにした。寺の名前は寶園寺である。早

速、本堂脇の庫裏を訪ね、案内を乞うことにした。

「こんにちは。室宮山古墳に行きたいんですが、どこでしょう」

「それならこの寺の真ん前ですよ。古墳の登り口は反対側です」

恐らく三十代と思われる若い坊さんが下駄をつっかけて、玄関から出てきてくれた。振り返って、坊さんの指さす方を眺めると、すぐ目の前に小山のような黒い森が見える。

「ありがとうございます。ご住職ですか」

「いや、副住職です」

「このお寺さんは古墳の真正面ですね。なにか古墳と関係があるんでしょうか」

「この寺のすぐ近くには京都と高野山を結ぶ高野街道がはっています。弘法大師が京の都と高野山を往



寶園寺 山門

来していた頃、その街道沿いにあった室の大墓（室宮山古墳）の御霊を鎮めたいと願い、この地に草庵を結ばれたのが寺のはじまりと伝わっております

「なるほど。当時は街道からもよく見渡せたでしょうね」

「弘法大師は国家鎮護のためには、不幸にして滅び去ったものの御霊を鎮めることが大切だと、ときの嵯峨天皇に説かれたといえます」

寺の方に向いているのは前方後円墳の前方部で、登り口は反対側の後円部にあるという。副住職に教えてもらった通り、住居が立ち並ぶ古墳の脇の道を辿る。後円部の形をなぞったように道は緩やかにカーブを描いているのが分かる。こげ茶色に塗装された板と白い漆喰の壁が美しい。ほどなくして八幡神社の境内の前に出た。

宮山古墳の名前はこの神社（宮）から来ているらしい。境内には「考安天皇室秋津島宮跡」石碑が建っている。日本書紀には「遷都於室地、是謂秋津嶋宮」とある。つまり都を室に移し、これを秋津嶋宮と呼んだということだが、それが御所市室だということ



室の集落

ある。

秋津という名前の由来については日本書紀に有名な記載がある。神武天皇がこの近くの腋上畷間の丘（わ

きがみほほまのおか)で国見をし、葛城山と金剛山の重なり合っている様子を見て、この国のすばらしさを褒め称え、「なんと美しい国だ。蜻蛉(あきつ)が交尾しているようだ」



八幡神社

と言ったことから、この地を秋津洲と呼ぶようになったという。すぐ近くには秋津小学校や秋津簡易郵便局もあり、この古い地名は今でも生き延びている。戦前には秋津洲は、日本そのものの異名として用いられた。

古墳への登り口は神社拝殿の脇にある。墳頂までは階段状に整備された坂道を二十五メートルほど登るだけだ。墳頂には直径三十〜四十メートルの円壇があり、樹木は伐採され草もき



孝安天皇室秋津島宮址

れいに刈り取られて、石室がのぞき込めるように穴があげられている。長さが二百メートルを超えるような大型古墳は、ほとんどが宮内庁から陵墓に指定されており、墳頂に上ることはおろか立ち入りさえできない



室宮山古墳。私の左が輪形埴輪のレプリカ、右が堅穴式石室の穴

い。室宮山古墳は、墳丘に登ることができ、さらに竪穴式石室に納められた長持形石棺までも間近に覗き込むことができる極めて貴重な場なのである。

写真でわたしの右側に開いている四角い穴が竪穴式石室である。石室は小さな板状の石で周囲を囲われており、大きな長持型石棺の端が見える。中に入ってみようと思ったが、やぶ蚊が群舞しているし、他人の墓の中に潜り込むことは気が引ける。腹ばいになって覗き込むだけにした。

写真で丸く突き出している部分は、縄掛突起と呼ばれ、石棺を運ぶ際に縄を描けた部分と考えられている。御所市が設置した案内板によれば、兵庫県加古川流域から運ばれた竜山石(たつやまいし)という凝灰岩

が用いられ、蓋石上面には八区画の亀甲形装飾と六か所に縄掛突起あるという珍しい石棺である。

長持型石棺は「王の棺」とも呼ばれ、葛城氏との深いかわりをもつ重要人物のみが使用を許されたという説がある。

石室の周囲には、内部への侵入を阻止するかのように甲冑・盾・鞆(ゆき)などの武威を示す埴輪が立てられていた。わたしの左に立っているのが靱形埴輪のレプリカである。出土した本物は橿原考古学研究



所付属博物館に鎮座している。鞆とは矢を携行する時に用いる矢入れ具のことである。古墳時代における弓矢は、単なる武器というだけでなく、武威を顕す象徴的な存在でもあったのだ。

副葬品は盗掘のため一部の破片しか残されていなかったが、三角縁神獣鏡や甲冑、刀剣などの武具、勾玉、管玉などの装飾品などが多数納められていたことが分かっている。また朝鮮半島の伽耶地域産とみられる陶質土器も出土しており、被葬者が大陸と積



調査中の石棺、小石を積んだ石室

極的なつながりを持っていたと考えられる。

遺体は残されていなかったが、この古墳に葬られたのは葛城ソツ彦であるという説が有力である。最近の考古学では古墳がいつ頃に築造されたのか、絶対年代を四半世紀あるいは十年単位で言えるようになってきた。この古墳の築造年代は四世紀末から五世紀初めと想定され、葛城ソツ彦の活躍した時代とびたり重なるのである。

さらに南葛城には全長二百メートルを超す首長墓とみられる大きな前方後円墳は室宮山古墳以外にない。これだけ大きな古墳に葬られるのだから、記紀をはじめ何らかの文献にその名を残す支配者的な人物に相違ないということからも葛城ソツ彦が有力視されるのである。

歴史学者・井上光貞先生の「葛城氏



室宮山古墳出土の形象埴輪、橿原考古学研究所附属博物館所蔵

のソツ彦は、まずまちががなく実在の人物である」という文章に出会って、この人物に大きな関心を抱き、葛城の地を訪れた。その上、葛城ソツ彦の遺体が納められ、多くの人の手で葬られたであろう古墳に詣でることができたことは旅の醍醐味である。

初めて竪穴式石室を覗くことができたことにも感激した。横穴式石室は何回も覗いたことがあるが、竪穴式石室は発掘が終わった後に閉じられてしまうことが多いことから、一般の古墳愛好家が目にする機会は少ない。室宮山古墳の詳細な調査報告書については御所市教育委員会から平成八年、『室宮山古墳範囲確認調査報告』が出されており、ネットにアップされているので誰でも読むことができる。

條ウル神古墳

次に訪れたのは室宮山古墳から東へ一キロメートルほど行ったところにある條ウル神古墳である。平成一四年（二〇〇二）三月十五日の各新聞は奈良県御所市で見つかった、巨大な横穴式古墳についての記事を一斉に、掲載している。

朝日新聞は「最大級の横穴式石室発見」という大見出しで、明日香村の石舞台古墳にも匹敵する石室を持った古墳だと紹介している。

この発見は専門家の間でも衝撃だったらしく、『古代葛城と大和政権（学生社）』の中で、「藤田さんが血相変えて飛んできましたから、これはただ事ではないかと直感しました」と檀原考古学研究所の河上邦彦研究部長が語っている。藤田さんというのは調査を担当した御所市の教育委員会文化財課の当時の課長である。

この古墳は大正時代に盗掘を受け、羨道部分に穴が開いていた。この穴から内部に入った人物がいる。奈良県の史跡調査の技手、西崎辰之助である。彼の報告は、この古墳は大規模な前方後円墳で、石室の中に大きな繰抜式家型石棺があるという



神古墳ウル條

報告をしている。しかしこの古墳の存在はいつしか忘れられ、地元の人たちによって開墾されたり、土を運び出されたり、果樹が植えられた

りしたため、古墳の形さえも分からなくなっていた。

御所市教育委員会は平成十三年から市内にある巨勢古墳群の調査の一環としてこの古墳にも予備的な調査を実施した。その結果が、新聞各紙の「大発見」報道につながったのである。

この古墳は所在地の地名を取って「條ウル神」と名付けられた。條は所在地の大字、ウル神は小字である。写真は東側の畑から撮った古墳だが、一見して古墳だとは分からないだろう。道路わきに市が建てた案内板がなければ、見過ごしてしまうところだった。

古墳の北側で畑仕事をしている人を見つけたので、話を聞いてみることにした。

「新聞報道で有名になったから、もっと整備されていると思って訪ねて



きたんですが、ひどい状態ですね」
 「大騒ぎの後に、市がこの畑も含めて古墳全体を買いとることになった。わしもとっくにハンコを押したが、

その後、市はなんにもせん」

「古墳は民有地だったんですか」

「そうだ。昔はちゃんと耕作もして、きれいにしとった」

「市はなぜきちんと整備しないんですか」

「金がないんだろう。用地買収をして発掘するとなると五億円かかると市長が言っとった。市の職員を減らしたり議員の歳費を減らしたりして、ぐらいだからな」

文化財関係予算の乏しい市が大規模な発掘をすることは現時点ではおぼろしい。考古学者や古墳愛好家にとっては、詳細を一刻も早く知りたいところである。

とりあえず現在までに分かっていることを紹介しよう。まず横穴式石室の長さは、十五・六メートル以上、高さ四・二メートル以上と巨大である。



条ウル神古墳から金剛、葛城の山並みを眺める

「以上」というのは内部に土が堆積して、正確な大きさが図れないからである。これは欽明天皇陵といわれる丸山古墳（橿原市）や石舞台古墳（明日香村）に続く規模だ。

石棺は長さ二・八メートルもある。石棺の蓋は長辺に各三つ、短辺に各一つの計八つの縄掛突起がある極めて珍しい特徴を持ち、国内屈指の規模を誇る石室、石棺といえる。遺物では、盗掘は受けているものの、金銅製の冠や青銅鏡の破片、銀製の装飾品などが出土した。

築造時期は六世紀後半とみられる。被葬者はその規模から記紀に名前が登場するほどの重要人物と推測されている。五世紀代にこの地を支配していた葛城氏、他に山ひとつ離



調査中の石室と石棺

れた巨勢谷を拠点としていた巨勢氏、葛城氏が衰弱した後、この地に入り込んできた蘇我氏など学者の間でも意見が分かれている。

本格的な発掘調査が行われなければ、これ以上の推測は難しいだろう。石室内部は大量の砂で埋まっていたり、かつては水が溜まっていたりするということなので盗掘を免れた貴重な副葬品が見つかる可能性が高い。

幸いなことに、わたしが訪問した直後、令和三年十月十一日付けでこの古墳は国史跡に指定を受けた。国史跡とは文化財保護法に基づいて国が指定するもので、遺跡のなかでもとくに重要なものを「史跡」という。これにより、條ウル神古墳の文化的価値が、正式に国に認められたわけで、調査が進展することを期待したい。



日本武尊琴弾原白鳥陵

條ウル神古墳から田舎道を迷いながらも白鳥陵（しらとりのみささぎ）に何とかたどり着いた。陵という呼び方は、宮内庁管理の古墳で、ふつうは天皇と皇后に限られ、その他の皇族は墓と呼ばれるが、日本武尊は有名なので特別扱いなのかもしれない。

田んぼの脇に車を止めて、陵がある富田の集落の中に入っていったのだが、古風な民家が両側に軒を並べる細い路地裏の突き当りに白鳥陵はあった。

宮内庁指定の陵墓だけに、上り口から玉砂利を敷いた擬木の階段がある。さぞかし立派な古墳なんだろうと、期待に胸を膨らませて登って行くと、あっけなく拝所の前に出た。



「日本武尊琴弾原白鳥陵」の石碑が立っている。立ち入り禁止の制札と鉄格子があるのはほかの陵墓と同じだが、

ここには陵墓にあるべき鳥居がない。天皇クラスに比べていくらか手を抜いたのだろうか。

現在、宮内庁が治定している陵墓には根柢の薄弱なものが多いが、この陵もその典型といえる。明治九年に、明治政府の教部省により指定された。

「御所市史」に「琴ひき原」と呼ばれる地の御茶山という塚が白鳥陵ではないかと書かれており、それが根柢とになっている。墳丘長一四九メートルの前方後円墳で、五世紀後半に築造された古墳とされているので、記紀に描かれたヤマトタケルの時代とは全く合わない。

宮内庁指定の陵墓なので、発掘などの学術的な調査は行えず、墳形、築造年代、石室の形など肝心なことはよく分かってはいない。そもそもヤマトタケル自体が架空の人物で、宮内庁がこ

こをやマトタケルの墓と比定したのも「白鳥伝説」によるものだ。

御所市が陵の前に立てた「白鳥伝説」の説明版の記述をちよっと長くなるが転記しよう。

『古事記』・『日本書記』によれば、父の景行天皇から熊襲、出雲を征討するよう命じられ軍勢もないまま西国を平定、やっとの思いで大和に帰ってくるが、すぐさま東国の蝦夷を征討せよと命じられた。幾多の苦難の末、東国を平定されたが大和へ帰る途中、伊吹山の神との戦いに敗れ、傷を負い、能



日本武尊琴弾原白鳥陵 石柱



白鳥陵 拝所

褒野（のぼの・三重県亀山市）で故郷を偲んで

大和は 国のまほろば たたなづく
青垣 山隠れる 大和し美し

と歌い崩じられたので御陵を造り葬ったところ、白鳥となって大和へ飛び去り、やがて白鳥は琴弾原（ここ御所市富田）に留まった。そこに御陵を造ったところ再び白鳥が飛び立ち河内国の旧市邑（大阪府羽曳野市）に舞い降りたのでその地にも御陵を造った。その後白鳥はついに天高く飛び去ったという』

古代の英雄を偲ぶのには美しい伝説だ。わたしは若山牧水の白鳥の歌をすぐに思い浮かべた。

白鳥はかなしからずや空の青

海のをにも染まずただよふ

酒と旅をこよなく愛した詩人は、自らの孤独、苦境を白鳥に託したのだろう。詩人は空を飛ぶ白鳥を眺めているのではない。自らが白鳥なのである。周囲に染まらない孤高の姿がここにある。

古墳としてはあまり魅力のない白鳥陵に立ち寄ったのは、わたしがいま一番関心がある日本という古代国家がいつ成立したのかという疑問とかかわっているからである。ヤマトタケルの物語は、古代国家の成立の過程が歴史の中で回想され、一人の英雄像として凝縮されたものだ。

ヘーゲルはこのような英雄時代を共同体がまだ国家を形成するに至らず、共同体と個人の精神が対立せず「生きた絆」で結ばれ、英雄は共同体の指導者として自由な個性を發揮し、内外の危機に立ち向かった時代と考えた。

日本でもこのような時代が本当にあったのだろうか。歴史学者・石母田正（一九一〇〜一九八六）は終戦直後、『古代貴族の英雄時代』という著名な論文で、日本にもこのような英雄時代

があったのだとして大論争を巻き起こした。

石母田は「歴史的事実であることだけが歴史の真理ではなく、文学的な事実もまた歴史学の事実でなければならぬ」として、記紀のヤマトタケルの物語を国家成立の過程を象徴する英雄物語として読んだ。

ヤマトタケルの物語は、通過儀礼としての少年の成長物語、父と子の対立、放浪する英雄としての貴種流離譚、英雄の知恵と勇気など様々なモチーフが込められている。そして悲劇的、幻想的な結末に人々は涙せ



日本武尊・青木繁（東博所蔵）

ずにはいられない。

ヤマトタケルをモデルにした手塚治の『火の鳥・ヤマト篇』はアニメにもなったのでご覧の方も多いだろう。梅原猛の原作によるスーパー歌舞伎は市川猿之助が演じて大評判をとった。日本人はみんなヤマトタケルが好きなのである。

白鳥陵は古墳かどうかさえもはっきりしない（P 31の地図参照）丘陵の起伏そのままのような場所で、拝所も狭く、鉄柵の中はうっそうと茂る木立で昼なお暗い状態である。

鉄柵を設置した時に木を伐採した跡がわずかに奥の方に続いていたので、拝所の裏側に分け入ってみると畑らしきものに飛び出した。畑を通り抜けて、道路に出られるだろうと見当をつけて進んでいくと、何やら農作業中のばあさんに出会った。



「こんにちは。勝手に畑に入ってきてすみません」

歳は九十近いと思われるばあさんが、腰を伸ばしてこちらを振り向いた。

「なにしに来た」

「隣の古墳を見に来たんですが、間違っ
って畑に入ってきてしまいました」

「地元の人でも知らんようなところへ

よう来たな」

「この古墳はヤマトタケルの白鳥陵
だといいますが本当ですかね」

「わたしは嫁に来たからよう知らん
けど、爺さんが昔、この山は天王山と
呼ばれていたと言った。天皇さま
の山だからそうなんじゃろう。けれど
ここにはちょっと舞い降りただけで、
すぐさま河内の方へ行っちゃった。こ
こは何にもないし、間違っって舞い降り
たんと違うかの」

ばあさんは木の切り株に腰を下ろ
すと、わたしにも隣の切り株に座れと
進めてくれた。

「なるほど。ところでこの畑はおばあ
さんのうちの畑ですか」

「この辺の土地はみんなうちで持っ
ていたけど、農地解放で取られてしま
った。今はわしが一人でやってる」

「それは大変ですね。息子さんは？」



「三年前に消防署長を定年で辞めた
から手伝うと思ったが、なんにもやり
やあせん。田んぼもみんな小作に出し
てる。おお、小作なんて大きな声で言
うといかん。」

「ひとりでは大変ですね。今は何の作
業をしていたんですか」

「栗拾いをしとった」

ばあさんはよっこらしよと立ち上がる、どこから新聞紙を持ってきて、拾い集めたばかりの粟をたくさん包んで手渡してくれた。さらに家によってお茶を飲んで行けと勧めてもくれたが、これは丁重に辞退した。

格式のある旧家を背負ってきただろう雰囲気をも十分感じさせられるばあさんだったが、わが家だと指さす方を見ると、いぶし銀の大屋根が美しい母屋を中心に蔵らしき建物が立ち並び豪壮な家だった。

掖上罐子塚古墳

掖上（わきがみ）は記紀にも登場する古い地名である。孝昭天皇の宮殿があった場所について、古事記は「葛城之掖上宮」、日本書紀は「掖上池心宮」記している。掖の字をワキと読める人はあまりないだろう。難読地名の一



つである。

掖上の由来だが諸説ある。一つは清水が湧く場所に鎮座する神の地とする湧神説である。もう一つは掖は宮殿などの脇の意で、上は神の意とみられるから脇神という説である。両方とも

もっともらしいが決め手に欠ける。いずれにしても記紀が編纂された八世紀初めには存在していた地名であるから、約千三百年続く地名ということになる。

明治のころは掖上村という村があったが町村合併でいまは御所市になった。掖上はJR和歌山線の駅名や小学校、郵便局などの名前として残っている。

罐子（かんす）と読む。青銅や真鍮などで作られた湯沸かしのことで、罐子塚とは古墳の形が湯沸かしに似ていることからつけられたのであろう。罐子塚という名前の古墳は全国にいくつもあるので、地名をつけて「掖上罐子塚古墳」と呼ばれている。国の史跡にも指定されている。

さて、掖上罐子塚古墳は南葛城地方では室宮山古墳の二三メートルに



掖上罐子塚古墳

に次ぐ長大な古墳で、墳丘長約一五〇メートルを誇る。前ページの国土地理院の地図で見ても、先ほどの白鳥陵と違って前方後円形の墳丘がよく分か



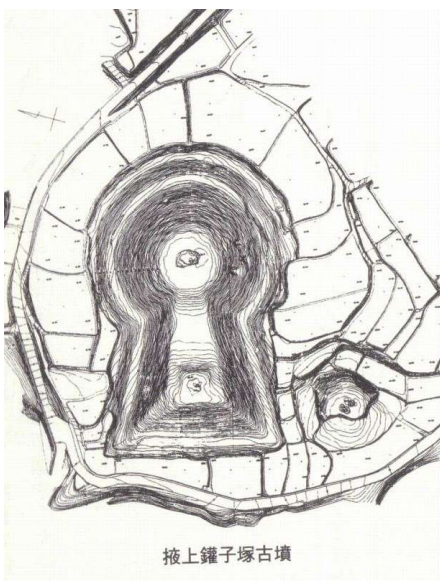
御所市が建てた案内板の航空写真

るだろう。

御所市が設置した説明版に航空写真があったので、それを参考にしながら古墳の形を見ていこう。墳丘は写真の下部からなだらかに続く丘を切断

した典型的な丘尾切断の形状である。古墳をUの字に取り巻く道路を走ってみると前方部が切通しになっていることが分かる。

前方部の長さは、後円部の直径に対して同程度と短い。前方部が短い古墳を帆立貝形古墳というがこれに近い。周囲は刈り取り間近の田んぼになっているが、かつて周濠だったところであろう。田んぼは等高線に沿ってきれいに畔が造られ、棚田状になっている。道路が微妙にカーブしているのも古墳の周堤状に造られたためである



う。

墳頂部や周濠からはさまざまな形象埴輪が見つかっている。家・蓋（きぬがさ）・冑などの埴輪とともに鳥の埴輪も見つかった。尾の形などから水鳥と推測されている。

ほかに金銅製帯金具、心葉形垂飾（しんようがたすいしよく）、挂甲小札、琴柱形石製品などの副葬品が検出されている。後円部にある埋葬施設はまだ調査が行われていないが、盗掘を受けていたようだ。江戸時代の文献には長持型石棺の存在が記されている。



出土した水鳥の埴輪



前方部

全長一五〇メートルの規模といい、長持型石棺の存在といい、この古墳が首長クラスの奥津城であることは間違いない。被葬者として江戸時代からさまざまな説がある。第六代孝安天皇

陵、日本武尊白鳥陵と記された文献や葛城氏や蘇我氏の伝説的な始祖とされる武内宿禰や雄略天皇に滅ぼされた葛城円大臣や眉輪王とする説もある。

しかし五世紀中葉という築造年代を考えると、すぐ近くの室宮山古墳の被葬者である葛城ソツ彦の子、あるいは孫の世代の首長クラスの墓と考えるのが妥当ではないだろうか。記紀によれば葛城ソツ彦の嫡男は玉田宿禰、孫とすれば円大臣ということになる。

條ウル神古墳のところでも登場した御所市教育委員会文化財課の藤田和尊課長は、円大臣の墓ではないかと主張する。

「奈良盆地からわざわざ見えないように押し込められているかの立地は特異でさえあり、悲劇的な最期を遂げ

る円大臣の奥津城に相応しい(藤田)」。円大臣については、この拙文の「葛城古道」の章で、南郷遺跡の紹介とともに触れた。大草香皇子の子の眉輪王が父を殺され母を奪われた恨みから安康天皇を弑逆、円大臣の家に逃げ込んだため、安康の弟の雄略が兵を起し、葛城本宗家の首長、円大臣を攻め滅ぼしたという記紀の記載である。

藤田課長はこの記載をもとに、雄略に滅ぼされた葛城本宗家が、雄略に遠慮して、あるいは雄略から何らかの規制を受けて、あまり目立たないように古墳づくりを行ったのではと推測したわけだ。

考古学者、白石太一郎は、室宮山古墳を「この古墳はある時期、葛城、平群、巨勢、波多、蘇我、紀といった、奈良盆地西南部から紀ノ川流域にかけての有力な在地豪族の共

通の祖先の墓と考えられていた」とし、掖上罐子塚古墳も葛城の英雄であった室宮山古墳の被葬者、葛城ソツ彦との系譜を意識して造営された可能性を指摘している。さらに白石は曾我川のすぐ東にある市尾古墳群を六世紀後半に力をつける前の蘇我



「古墳の被葬者を推理する」白石太一郎著より、筆者加筆

氏の奥津城と推定し、これとの関連にもおわせている。またすぐ南にある巨勢山古墳群の関係で、巨勢氏の首長墓とみる見方もある。

いずれにしても、掖上罐子塚古墳を最後として南葛城の地には、墳長百メートルを超えるような大きな古墳は造られなくなる。眉輪王の変によって葛城本宗家の円大臣が雄略に滅ぼされて以来、葛城氏の勢力が衰退したことが原因であろう。

エピソード

五紀後半の雄略天皇の時代(四五七〜四七九)は、列島各地の政治勢力の連合体としてのヤマト政権が質的に大きく転換した時期である。

激動は畿内にとどまらない。日本書紀は雄略による吉備氏の弾圧についても記述している。「吉備氏の乱」であ

る。雄略天皇七年に豪族、吉備氏の首長、吉備田狭（きびのたさ）が新羅と結託してヤマト政権に対して反乱を起こしたが、その勢力は雄略によって一掃される。吉備では五世紀初頭から中葉にかけて造山古墳、作山古墳、両宮山古墳という吉備の首長にふさわしい巨大古墳が三代にわたって造営されたが、この乱を最後に巨大古墳の造営は終息した。

朝鮮半島南部の勢力と組んで勢力を伸ばしつつあった葛城氏や吉備氏を恐れたヤマト政権は、軍事的氏族である大伴氏、物部氏などを使って連合内の大豪族を弾圧してゆく。ヤマト政権の力を強化し、専制的な政治体制を模索したのである。

雄略天皇（倭王武）が四七八年、中国に朝貢した際、中国南朝・宋の皇帝に奉った上表文には「わたしの先祖は

甲冑を着け、山や川を跋渉して戦を続け、東は毛人五十五国を、西は衆夷十六国を征服し、また海北へ渡り九十五国を平定した」とある。

また埼玉県の稲荷山古墳や熊本県の江田船山古墳から発見された五世紀後半の鉄剣、鉄刀には銘文が刻まれており、そこには雄略天皇を指す獲加多支鹵（ワカタケル）の文字と共に「治天下大王」という記述がある。雄略天皇が国内では天下を治める大王（おおきみ）と称していたことが明らかになった。



稲荷山古墳出土・金錯銘鉄剣

いくつかの豪族の連合体であったヤマト政権は、豪族たちを臣従させ、専制化を強めてゆく。日本は統一したクニとしての第一歩を踏み出したかのように見える。

ヤマトタケルのところで紹介した歴史学者、石母田正は『古代貴族と英雄時代』のなかで、五世紀までの日本の社会は「動的・英雄時代的」とするのに対し、六世紀からの日本は「世襲的王制を頂点とする支配と隷属の体制」になったと主張した。

六世紀ごろからヤマト政権の内部に行政組織の前身のようなものが出てくる。雄略天皇の名が刻まれた鉄刀・鉄剣の銘文には「杖刀人」（武官か）「典曹人」（文官か）という当時の官職名が記されており、日本書紀の雄略紀にも「○人」と称する官名が集中的に現れることから、政権

に奉仕する集団をその職掌によって分類した、後の時代の部民制の萌芽がこの時代にすでに現れていたことが分かる。

またのちの地方行政組織の先駆けともいえる屯倉（みやけ）がヤマト政権の直轄地として全国に設置される。屯倉はヤマト政権の財産であり、直接支配する土地であった。

おぼろげながらも日本というクニの姿が立ち上がってきたわけだが、歴史は直線では進まない。まだまだ日本という国ができあがるまでには紆余曲折があるのだが、それはまた違う機会にゆだねよう。

最後に気になるのは、葛城氏の本宗家が没落し、葛城氏が衰退してからの葛城の地がその後どうなったかである。

六世紀の後半から七世紀にかけて

ヤマト政権の内部で絶大な勢力を誇った蘇我氏は、葛城氏の本宗家が眉輪王の変で衰退してから、葛城の地を徐々に蚕食していったとされる。

蘇我氏はもともと葛城氏の中の一豪族だったという説がある。親分が減んで、そのうちの子分が重しが取り除かれたごとく台頭してきたわけだ。

眉輪王の変から百五十年ほどたった推古天皇の時代のことである。大きな権力を握った蘇我馬子は、推古天皇に「葛城県はもともとわたしの故郷です。その県の名前に因んでわたしたちの姓名も付けられています」と言って、葛城氏が滅亡した時に大王家に没収された葛城の地を蘇我氏に与えるように要請している。

葛城の地を手に入れ、権勢をふるった蘇我氏も、やがては大化の改新

（乙巳の変）で滅ぼされ、歴史の表舞台から姿を消してゆく。

「国破れて山河あり」と唐の詩人は詠ったが、それは時空を超えて真実である。葛城山と金剛山はいまも静かに葛城の地を見下ろしている。

二〇二一年十二月吉日

川崎光洋